

令和元年6月27日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02551

研究課題名（和文）18世紀フランスにおけるミソジニー（女性嫌悪）とナショナリズム

研究課題名（英文）Misogyny and Nationalism in 18th Century France

研究代表者

玉田 敦子（TAMADA, Atsuko）

中部大学・人文学部・教授

研究者番号：00434580

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：フランス啓蒙における《近代》の構想は、女性を二流市民として社会的に抑圧することに立脚するものであった。この点については1970年代初頭より、水田珠枝、スーザン・M.オーキンなどを嚆矢とするジェンダー史研究者によって指摘がなされてきたが、現在までフランス啓蒙が孕むジェンダー的な瑕疵はあくまで周縁的な問題とされてきた。本研究課題においては、道徳的規範である習俗と、美的規範である趣味が啓蒙期フランスにおいてそれぞれ大きく変容したことを女性に対する抑圧の一端と捉えることによって、17世紀に宮廷やサロンを中心に醸成された女性的な文化が批判され、男性的な習俗と趣味が称揚されるようになった経緯を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

17世紀に宮廷やサロンを舞台とした雅やかな文化が発展したのに対し、啓蒙の世紀には「女性的なるもの」が貶められ、攻撃されるようになる。商業社会の興隆を背景にして発展した女性的な文化は、習俗と趣味にそれぞれ「洗練」をもたらすと考えられていたが、趣味や習俗は洗練されることによって「女性化」し、墮落するという声が大きくなっていく。本研究課題「18世紀フランスにおけるミソジニー（女性嫌悪）とナショナリズム」の学術的意義は、七年戦争以後におけるナショナリズムの台頭とともに顕著になるヒロイズムへの偏向が、18世紀フランスにおける習俗と趣味の男性化に与えた変容を浮かび上がらせることである。

研究成果の概要（英文）：Enlightenment philosophy has often been the target of feminist criticism as it has been considered a foundation of the patriarchal and androcentric ideology. In the second half of the 20th century, Japanese and American research on gender, such as that of Tamae Mizuta and Susan Moller Okin, contributed to this criticism. However, until now, in most cases, there has been little reflection on gender bias in French enlightenment research, and that gender defect has been regarded as a marginal issue. This project focused on how the elegant and feminine culture developed in the classical age was threatened by the masculinization of taste and moeurs due to the rise of nationalism in the middle of the 18th century.

研究分野：フランス文学

キーワード：18世紀 啓蒙 ジェンダー ナショナリズム ナショナルアイデンティティ フェミニズム フランス 国際共同研究

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

17世紀に宮廷やサロンを舞台とした雅やかな文化が発展したのに対し、啓蒙の世紀には「女性的なるもの」が貶められ、攻撃されるようになる。商業社会の興隆を背景にして発展した女性的な文化は、道徳的な規範概念である「習俗(mœurs)」と美的な価値判断である「趣味(goût / taste)」にそれぞれ「洗練(sophistication)」をもたらしと考えられていたが、その反面、趣味や習俗は洗練されることによって「女性化」し、墮落するという声が大きくなっていく。

こうした「習俗」の変容について、ポーコックの『徳・商業・歴史』は18世紀を、古代ギリシアに淵源をもつ「市民的徳(civic virtue)」から、商業社会の基盤となる「近代的」倫理への転換期と位置づけている。18世紀フランスにおいては、英語圏の思想の影響を強く受けたモンテスキューやヴォルテールが、ポーコックの論じるとおり、商業の発展にもとづく習俗の「洗練」に対して好意的であったとはいえ、商業の発展とその結果である奢侈、女性的な文化は、それぞれ必ずしも肯定的に受け入れられていたわけではない。それどころか18世紀のフランスにおいて女性は、「習俗の墮落」の要因と見なされるようになり、前世紀にサロンや宮廷を発信源として成熟した女性的な文化に対する批判が高まっていく。

近年、歴史学の分野において、アラン・コルバン、ジョルジュ・ヴィガレロが監修した『男性性の歴史』、ドミニク・ゴディノーの『近代フランスにおける女性』といったジェンダー的価値観の変容に関する研究の刊行が相次いでいる。ところが、18世紀フランス研究における中心的課題である習俗、趣味をめぐる問題は、ジェンダー的価値と切り離すのが不可能であるにもかかわらず、ジェンダー的視点をもつ包括的研究は未だ見られない。また従来、こうした「習俗」の変容は、近代科学が発展する過程でキリスト教権力が後退し、知識の変革と同時に社会が世俗化したことによって引き起こされたと考えられてきた。

このような考え方に対して、本研究課題においては、18世紀フランスにおける「習俗」の変容がジェンダー的な価値観の変化と密接に結びついていることに着目し、女性的文化の衰微と七年戦争以後におけるナショナリズムの台頭と相俟って勢いを強めていくヒロイズムへの偏向に焦点を絞って考察をおこなった。

### 2. 研究の目的

17世紀以降のフランスにおいては、サロン文化が洗練させた女性的な文化に対する批判、そして七年戦争以後におけるナショナリズムの台頭とともに顕著になるヒロイズムへの偏向が習俗と趣味の変容をもたらしした。本課題「18世紀フランスにおけるミソジニー(女性嫌悪)とナショナリズム」においては、18世紀フランスにおける「女性的な文化」の地位の低下について、当時の道徳的な規範、「習俗」と、この「習俗」と深く結びついた美的な尺度である「趣味判断」の変容について考察した。本研究課題の目的はこの「習俗の変容」とジェンダー的価値観の変化に関する研究を深化させ、啓蒙の世紀において新しい倫理観が形成される過程を明らかにすることである。

### 3. 研究の方法

本研究では「修辞学理論書」を中心とした一次資料のテキスト分析に基づく実証的方法と、フランス文学、政治思想史、社会史など複数の学問領域の方法を併用した。研究を遂行するにあたって、ILL サービスの活用と近刊図書を購入によって国内で入手可能な文献を渉猟する一方、2016年から3年度にわたって、夏季・春季の休業中、年間合計60日にわたり、パリのフランス国立図書館において、18世紀フランスにおける「ミソジニー」と「ナショナリズム」について充実した資料調査をおこなった。また、上記出張中には、パリ・ソルボンヌ大学のセリヌ・スペクトール教授、リール第3大学ガブリエル・ラディカ教授、ジュネーブ大学のマルタン・リュエフ教授ら、18世紀フランス思想史の泰斗と研究打ち合わせを重ね、啓蒙期における父権的な家族観の確立とナショナリズムの高揚について継続して議論をおこなった。

内容に関して具体的には、以下の4つの工程を通して研究を遂行した。

- (1) 18世紀フランス政治思想史における「ミソジニー」の理論的形成
- (2) 18世紀フランスの文学作品における「ミソジニー」的言説の展開
- (3) 18世紀フランス修辞学における「男性的文体」の称揚
- (4) 18世紀フランスにおける新旧論争と「趣味」の男傾化

### 4. 研究成果

本研究の成果については、研究期間内に発表した論文(8件)、著書(4件)にまとめたほか、現在、単著の書籍の刊行を準備している。また、招待講演5回を含む11回の研究発表をおこなった。

- (1) 18世紀フランス政治思想史における「ミソジニー」の理論的形成

18世紀フランスにおける女性批判のもっとも重要な論拠をなしていたのは「女性は習俗を腐敗させる」という主張であった。この習俗の腐敗を根拠とする女性批判に関してはルソーの『学問芸術論』、『ダランベール氏への手紙』が知られているが、こうした批判は、ルソーに限らず、モンテスキューの『法の精神』をはじめとする18世紀フランスにおいて刊行されたあらゆる著作に見られるものである。とはいえ前世紀のフランスにおいて、サロンや宮廷を中心に女性的な文化が発展したのに対して、18世紀になるとフランスではこうした女性的な文化に対する批

判が強くなる。しかしながらこうした価値観は、当時のフランスに固有の偏見、もしくはフランスが他のヨーロッパ諸国に発信し、広めた偏見であり、ヒュームやスミスなど、スコットランド啓蒙の思想においては女性的な文化は尊重されていた。ところが18世紀のスコットランドとフランスの政治思想におけるジェンダー観の明白な差異に対しては、これまで目立った個別研究が見られない。

本研究においては、18世紀フランスにおける女性批判の高まりについて、世紀後半におけるナショナリズムの高揚と結びつけて分析し、このミソジニーの本質について当時の議論の思想的背景を探ることで考察を多角的に深化させた。

#### (2) 18世紀フランスの文学作品における「ミソジニー」的言説の展開

従来、18世紀フランスを対象とするジェンダー研究においては、オランブ・ド・グージュなどの女性作家を対象とした研究が主体であり、「男性が描く女性」における「ミソジニー」的な視点は看過されてきた。本研究において着眼したのは、18世紀フランスにおいて「習俗の墮落」をもたらす女性的な文化と対置され、高い価値を付与されるのは、古典古代の文芸作品に範をとり「英雄」的な行為に身を捧げる「男性」という点である。フランスでは、1701年にボワローが増補改訂したロンギノス『崇高論』の序文で、コルネイユ作品の「英雄性」をそれまで古典古代に固有の価値であった「崇高」と称したことが端緒となり、以後ボワローの「崇高論序文」は典拠として参照されるようになる。

本研究においては、18世紀フランスにおける近代的女性像の成立において、父権的な家族観とナショナリズムとの関わりを手がかりに考察をおこなった。具体的には、ルソー『エミール』第5篇、そして『エミール』のエピローグである『エミールとソフィー』に描かれるエミールの配偶者ソフィーに対する教育とその失敗が「近代のミソジニーの起源」としての役割を果たしていたのではないかという観点から考察を深化させ、研究発表と論文の執筆をおこなった。

#### (3) 18世紀フランス修辞学における「男性的文体」の称揚

「説得の技術」として古代ギリシアにおいて誕生し、キケロらによって言説の構築に関する方法論として体系化された「修辞学」は、17世紀フランスにおいては「不十分なラテン語教育」として機能不全に陥っていた。18世紀になると「修辞学」は、法曹界の拡大、官僚組織の発展、商業ブルジョワジーの台頭などによる身分制社会の流動化にともない、フランス語によってフランス語の文献を用いておこなわれるようになったことから息を吹き返す。

17世紀の修辞学理論においては、簡潔で力強い文体の理想とされた「アッティカの文体 (style attique)」が、ヴォワテュールらがキケロを参照して提唱した「urbanité (都会的な洗練)」と呼ばれる優雅で女性的な文体と同列のものとして対置されていたが、18世紀にルソーが『学問芸術論』において urbanité を女性的で柔弱、軽薄な文体として批判したことにより、アッティカの文体は「男性的な文体」として称揚されるようになる。本研究では、18世紀フランスにおいて確立した近代修辞学における「男性的文体」の称揚について考察をおこなった。

#### (4) 18世紀フランスにおける新旧論争と「趣味」の男傾化

18世紀のフランス語修辞学においては、コルネイユ、ラシーヌなど、フランスの「黄金時代」とされたルイ14世期の作家の文学作品を模範として「趣味判断」の能力を養成することが求められた。ところが18世紀フランスにおける修辞学は前世紀の文学作品を「新しい古典」として称揚する際に、修辞学が理想とする「崇高」とヒロイズムを結びつけるようになり、このことから修辞学においても「男性的」な価値がもてはやされるようになる。とりわけ七年戦争の敗戦以後台頭したナショナリズムと相まって勢いを強めていくヒロイズムへの偏向はこの「男性的」な価値の回帰を後押しし、「崇高」はエドモンド・バークによって「ロココ的」、すなわち女性的かつフランス的な「美」の概念と対置されることにより「男性的価値」としての地位を確立していく。

本研究においては、18世紀における「新しい古典」の生成と趣味概念の変容について、17世紀からの新旧論争の議論を踏まえて考察をおこなった。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計8件)

玉田敦子、レトリック発祥の地の輝き—紀元前5世紀の南シチリアにおける僭主政とオリンピック、人文学部研究論集、査読無、41号、2019年、pp.41-69。

横手直美、玉田敦子、フランスにおける無痛分娩の普及の背景と現在の課題(後編)、助産雑誌、査読無、73巻2号、2019年、pp.138-142。

横手直美、玉田敦子、フランスにおける無痛分娩の普及の背景と現在の課題(前編)、助産雑誌、査読無、73巻1号、2019年、pp.52-56。

玉田敦子、世界表象の光と闇—エナルゲイアとエネルゲイアの概念をめぐって、STELLA、九州大学フランス文学研究会、36号、2017年、査読有、pp.55-75。

玉田敦子、フランス啓蒙と女性の地位、奈良女子大学文学部研究教育年報、第13号、奈良女子大学、2017年、査読無、pp. 11-19。

Atsuko Tamada, Le goût et la sensibilité pour le sublime, *Implications philosophiques*, numéro spécial : Culture et sentiment au XVIIIe siècle, éd. G. Radica, 2017、査読有 (On line)。

玉田敦子、古代ギリシアのリベラルアーツ構想とその近代化、Glocal、中部大学国際人間学研究科、査読無、9号、2016年、pp. 4-5。

高岡尚子、玉田敦子、中川千帆、倉田容子、恐怖・嫌悪・欲望とジェンダー、cahier、日本フランス語フランス文学会、査読無、18号、2016年、pp. 17-20。

〔学会発表〕(計11件)

Atsuko TAMADA【招待講演】La représentation de la pluralité : pour une relecture de Foucault, Collège international de philosophie, séminaire dirigé par Claire Fauvergue, 2019年。

玉田敦子、近代の生成と女性 — 古代近代論争とアカデミー・フランセーズの政策をめぐって、中部高等学術研究所「近代古代」第3回サブセミナー、2018年。

玉田敦子【招待講演】世界から作者へ—18世紀フランスの文学における vraisemblance (真実らしさ)、「啓蒙とフィクション」研究会、2018年。

玉田敦子【基調講演】18世紀フランスにおける近代と古代、中部高等学術研究所「近代古代」第1回サブセミナー、2018年。

玉田敦子【招待講演】マリー・アントワネットとミソジニー—18世紀フランスの《男性》市民社会とフランス革命、「革命/内乱とジェンダー」研究会、2017年。

玉田敦子、18世紀フランスにおける表象理論の刷新と複数性、第39回日本18世紀学会全国大会シンポジウム「世界の複数性」、2017年。

玉田敦子、18 (Citoyen) (18世紀フランスにおけるシトワイヤンの形成と趣味概念：金俊培訳、公共知研究会、2017年。

玉田敦子【招待講演】18世紀フランス修辞学における理想の文体と「女性」、第172回(再編第47回)関西フランス史研究会例会、2017年。

玉田敦子【招待講演】ルソーと ミソジニー 的近代の成立、中央大学人文科学研究所「ルソー研究」公開研究会、2016年。

玉田敦子、近代とリベラルアーツ — 18世紀フランス修辞学を中心に、中部大学国際人間学研究科第5回研究会、2016年。

玉田敦子、モンテスキュー・女性・国家 — フランス啓蒙とミソジニー、日本フランス語フランス文学会春季大会ワークショップ「恐怖・嫌悪・欲望とジェンダー」、2016年。

〔図書〕(計4件)

安藤隆穂、玉田敦子【共編著】中部高等学術研究所共同研究「人文学の再構築」第4回研究会報告書、Studies Forum Series、108号、中部高等学術研究所、2019年2月、35頁

安藤隆穂、玉田敦子【共編著】中部高等学術研究所共同研究「人文学の再構築」第3回研究会報告書、Studies Forum Series、107号、中部高等学術研究所、2019年2月、35頁。

安藤隆穂、玉田敦子【共編著】中部高等学術研究所共同研究「人文学の再構築」第2回研究会報告書、Studies Forum Series、106号、中部高等学術研究所、2019年2月、40頁。

安藤隆穂、玉田敦子【共編著】中部高等学術研究所共同研究「人文学の再構築」第1回研究会報告書、Studies Forum Series、104号、中部高等学術研究所、2016年10月、28頁。

〔その他〕

ホームページ等

<https://researchmap.jp/read0132088/>

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。